

キーワード：SNSの利用、情報発信の責任、リスクの予想、コミュニケーションのズレ

## I 研究について

### 1 情報モラル教育に関する学校の課題

本校では、昨年度、SNS利用に関連したトラブルが複数件起きた。いずれも、「相手を傷つける内容は書き込まない」、「本人の許可を得ずに写真を投稿しない」などの基本的なルールが守られていないために起きたトラブルである。

そこで、本校では、1年目の研究として、「ネット利用診断サービス」を活用して生徒の実態把握に努めると共に、SNSの適切な活用を含む情報活用能力の育成についての研究を行うこととした。特に本校の指導の重点として掲げる「人権教育」の視点を基に学校教育の様々な場面を考えさせることを意識した。

校内研修では、静岡大学教授の塩田真吾先生の資料や文部科学省の資料「情報化社会の新たな問題を考えるための教材」を中心に研修を行い、本校職員の指導力向上を目指した。

### 2 研究の概要

時 期	実 施 内 容
7月1日	第1学期保護者会「情報モラル教育講演会」 講師 南会津警察署生活安全課 鈴木 麻友 様
7月14日	第1回 校内研修「情報モラル教育の現状と課題」について
1学期中	「ネット利用診断サービス」の実施
7月20日	第2回 校内研修「ネット利用診断サービス」の結果分析
8月31日	第1回地区別研究協議会で発表
9月15日	第1回 校内研究授業 第1学年 学級活動 指導助言者 医療創生大学 教授 中尾 剛 様
9月24日	第3回 校内研修「情報活用能力の育成」について
11月22日	第2回 校内研究授業 第3学年 道徳科 指導助言者 医療創生大学 教授 中尾 剛 様
1月19日	第4回 校内研修「教材の作成」について
2月10日	第5回 校内研修「実践のまとめ」について
2月21日	第2回地区別研究協議会で発表

## Ⅱ 研究の実際について

### 1 校内での実践

#### (1) 第1学期保護者会 情報モラル教育講演会（7月1日）



1学期末の保護者会開催に際し、「情報モラル教育講演会」を設定し、生徒と保護者が同じ話を聞く機会を設けた。

講師には、南会津警察署刑事生活安全課より鈴木麻友様にお越しいただいた。鈴木様から、県内のインターネットに関わるトラブルの発生状況や青少年の被害の実態等について、具体的に説明を頂いた。また、トラブルから身を守るための行動の仕方についても教えて頂き、大変貴重な機会となった。

### 2 校内授業研究会での実践等

#### (1) 第1学年 学級活動「SNS を介したコミュニケーションにおけるリスク予想」の実際



この授業では、コミュニケーションにおけるリスクを予想するとともに、他者との予想の違いに気付かせ、リスクを回避しながら意思疎通する方法について考えさせることをねらいとした。実際の授業では、「SNS ノート」の「こんなつもりじゃなかったのに」というページを用いて、グループトークの事例から、「この後、どうなるか」を予想し、なぜそのように予想したのかをグループで話し合わせた。

その後、特に「気まずくなる」「けんかする」と予想したトークについて、どの発言やスタンプが問題になりそうかを話し合わせた。

これらの活動を通して、生徒たちは「文章だと表情が分からないから、書き方に気を付ける」「先のことを考えて、トークしたり、発信したりする」ことが大切であると実感していた。

## (2) 第3学年 道徳科「情報を発信するときの責任について考えよう」の実際

この授業では、東日本大震災に関連した SNS への投稿に対して、どのような対応をするかを考えさせることを通して、情報を発信する際には責任が伴うことに気付かせることをねらいとした。

最初に、放射線に関する風評についての発信を目にした際に、どのように対応するのかを考えさせた。多くの生徒は、トラブルに巻き込まれるのを避けるために、書き込まないという意見だった。

次に、福島県産の農産物の安全性を PR するような発信を依頼されたときに、どのように対応するのかを考えさせた。最初の事例よりも書き込みをするという意見が多く見られた。宣伝しなければ良さは伝わらないし、誤解も解けないという理由だった。これらの活動を通して、発信には正しい知識が必要であること、発信した内容については責任が生じることを実感していた。



## (3) 研究協議会の様子



(第1回研究協議会の様子)



(第2回研究協議会の様子)

第1回の研究協議会では、中尾先生より、SNSでのやり取りにおけるリスクを予想させるにあたって、「なぜその発信をしたのか?」「なぜそのスタンプを使ったのか?」等、発信の意図を考えさせると良いと助言いただいた。善意で発信した言葉やスタンプであっても、相手の受け取り方によっては悪意と受け取られる場合があることを意識する必要があることを学んだ。

第2回の研究協議会では、情報モラル教育の授業を組み立てる際、題材を生徒にとって身近な内容にすることで、自分事として考えられるようになるということ、また、SNSでの書き込みへの反応について、「返信する」「転送(拡散)する」方法もあるが、「何もしない(読み流す)」という方法もあると気付かせるると良いと助言いただいた。

併せて、ネット上で発信、書き込み等をするによりどのようなリスクが生じるのか、「見積み」できる力を育ててほしいというお話を頂き、今後の方向性を見出すことができた。

## 講演「小中学生の情報モラル」

講師 医療創生大学 心理学部 教授 中尾 剛 先生



中尾先生には、青少年のインターネット等の利用実態やネット依存のタイプ、青少年の被害が多いサイト（アプリ）等について、具体的な資料を基にお話し頂いた。その中から、情報化社会が進む中でまずやるべきことは、子どもたちをさまざまな危険から守ることであると学んだ。

また、トラブルが起きやすいのは顔が見えない状態でコミュニケーションを取っている時であること、情報化が進んでもリアルなつながりが重要であることも学んだ。

他方、ICTの活用が進められているが、ICTに依存しないような生徒を育てていくことも必要であると御指導をいただいた。今後の実践の方向性を見出すことができる機会となった。

## Ⅲ 成果と課題について

### 1 成果

- 情報モラル教育を進める中で、生徒のみならず教職員にとっても、人権教育に対する意識を高めることにつながっていると感じている。
- 第2回校内授業研究会の際、校区内の小学校の先生方にも授業を参観していただき、本校の取組を知っていただくとともに、各校の状況について情報交換を行うことができた。
- 情報モラル講演会や2度の研究授業、中尾先生の講話等を通して、情報モラル教育は、情報教育担当者や学級担任だけでなく、全教員で取り組んでいく必要があるということが浸透してきている。

### 2 課題

- 来年度は、教育課程の中の位置付けを明確化し、意図的・計画的に取り組めるようにする。その際、「どんな内容を」、「どの学年で」、「どの場面で」指導するのか等を整理していくことが必要である。
- 生徒一人一人の情報モラルがどのように変容したのか、客観的に生徒の実態を捉える方法を工夫していきたい。
- 今年度は、学級活動と道徳科の実践を重ねることができたが、各教科、総合的な学習の時間等でどのような取組をすれば良いかについては、今後の課題である。